

ヘットナーに関する地理教育論的考察

山口幸男

群馬大学教育実践研究 別刷

第26号 1~7頁 2009

群馬大学教育学部 附属教育臨床総合センター

ヘットナーに関する地理教育論的考察

山口 幸 男

群馬大学教育学部社会科教育講座社会科教育研究室

A Study on the A.Hetter's Geography from the Viewpoint of Geographical Education

Yukio YAMAGUCHI

Department of Social Studies Education, Faculty of Education, Gunma University

キーワード:ヘットナー、地理教育、地誌学習、地理学、地誌学

Keywords : A.Hetter, Geographical Education, Regional Geographical Education,
Geography, Regional Geography

(2008年10月31日受理)

1 はじめに

本稿は、地理学史上の巨人であり、現代の地理学に最も大きな影響を与えた地理学者の一人とされるドイツのアルフレート・ヘットナー(1859-1941)の地理学について地理教育論の立場から考察するものである。ヘットナーの著『地理学—歴史・本質・方法』は1927年に刊行され、2001年、ようやく平川他によってその和訳が完成された(平川・守田・竹内・磯崎2001)。本稿は基本的にはこの訳書を資料にして考察する。ヘットナーの地理学について考察した論考は従来いくつかあるが、地理教育論の立場からの考察は皆無である。

ヘットナー『地理学—歴史・本質・方法』(以下『地理学』と略称)の訳書は全673頁、全9部からなる大著で、その目次は表1の通りである。ラッツェルの『人類地理学』(1882,1891)やブラーシュの『人文地理学原理』(1922)に比べて興味深いことは、第7部が「地理学的教養」、第8部が「初等学校、中等学校における地理学」というように、地理教育に直接関わる内容の含まれている点である。

以下の本文中において、()書きで記されている

頁数は、ヘットナー『地理学』(訳書)のページ数を示している。

2 ヘットナー地理学の特徴

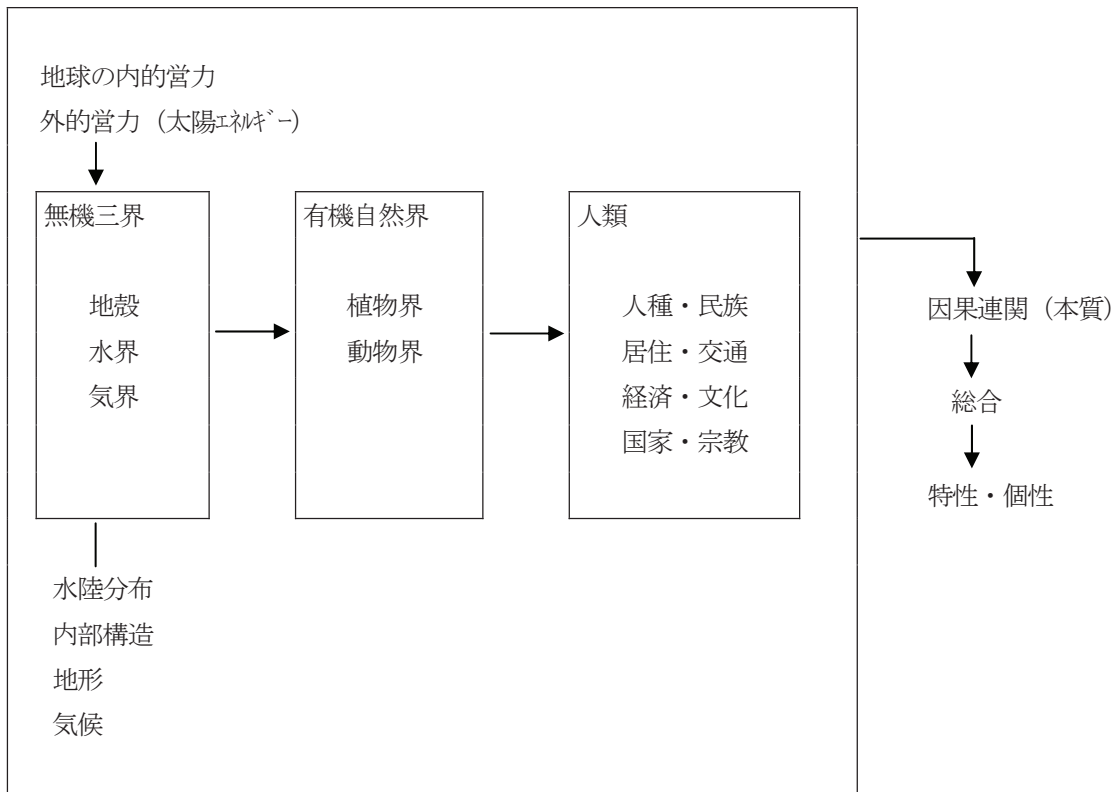
近代地理学の祖とされるフンボルト(1769-1859)とリッター(1779-1859)によって近代地理学が確立した後、リヒトホーフエン(1833-1905)、ラッツェル(1844-1904)、ブラーシュ(1845-1918)らが地理学の発展を促進し、20世紀のA・ヘットナー(1859-1941)へと至る。「19世紀地理学の動きをふまえて、それを20世紀の近代科学にふさわしくあみなおした功績はまず第一にヘットナーに帰さなければならない。」(水津1974)、「ヘットナーの地理学は今日の地理学の発展の源流ともなっている。」(野間1967)と評されるように、ヘットナーによって現代に直接連なる地理学の基盤が形成されたといえよう。

ヘットナーは科学論全般の中における地理学の位置、地理学の存在根拠を究明し、地理学は地域に関する科学、地域性を明らかにする科学であり、それゆえ、「地誌学」こそが地理学の中心、地理学の王座であると主張した(水津1974)。今日、地誌学がそれだけの

表1 ヘットナー『地理学—歴史・本質・方法』の目次

序文	3 地球儀と地図投影法
第1部 地理学史	4 地図学的叙述の一般的特性
序論	5 地形図
1 自然民族および古代文化民族の地理学	6 自然地理学図と人文地理学図
2 古典時代における地理学	7 地図学に関する文献
3 中世における地理学	8 地図の画像
4 近世における地理学	第6部 言語による記述
5 19世紀ならびに20世紀における地理学	1 言語による叙述の本質と課題ならびに地図との関係
第2部 地理学の本質と課題	2 叙述についての作業
1 科学の体系	3 地理学的固有名詞
2 一般地球科学は可能か	4 地理学的術語
3 地表の地域科学としての地理学	5 叙述の多様な形式
4 地理学の諸部門と自然科学との関係	6 叙述の手段
5 審美地理学と芸術としての地理学	7 地理学の体系(一般地理学と地誌学)
6 応用地理学	8 地理学の文献
第3部 地理学的研究	第7部 地理学的教養
1 探検	1 地理学的教養の本質
2 位置の決定と地図の作成	2 地理学的教養の方向
3 地理的観察	3 地理学的教養の価値
4 地図上の研究と文献上の研究	4 地理学的教養への経路
5 因果関係の吟味	第8部 初等学校、中等学校における地理学
6 空間関係の構成	1 地理学の立場
7 地理学の諸分科における研究	2 学校での地理学の課題
8 地域の審美的ならびに応用的価値に関する研究	3 地理の授業の内容
第4部 地理学的概念及び思想の形成	4 地理の授業の主領域
1 地理学理論の課題と意義	5 地理の授業の進行
2 地理学的解釈の本質	6 教授法
3 地理的事実	7 地理の授業の補助手段
4 地理的要因	8 地理の教師
5 自然界における土地空間	第9部 大学における地理学
6 大陸、地方、景観	1 大学ならびに他の高等専門学校における地理学の立場
7 景観の審美的価値	2 地理学の研究
8 景観の実用的価値	3 学習と整理
第5部 地図と見解	4 大学における地理の教育
1 地図学の意義とその発達	
2 地図学的作業	

図1 ヘットナーの地誌における地域の構造的把握



任に耐えうるものに発展しているのかどうかは別にして、地誌学こそが地理学を中心であり、地理学が存在根拠であるという考え方は、今日においても大方の承認は得られているように思われる。

ヘットナーは、科学としての地理学は事実の客観的把握の上に立たねばならないこと、また、事実の把握だけでなく、事象間の因果関係を明らかにしなければならないことを強調した。客観的・事実に基づく基盤の上に立って、地域性に関わる因果関係を究明しようとする実証主義的・科学主義的な地理学がヘットナーの地理学であり、実証的・客観的な基盤を持たないもの、たとえば、世界観、文明観、思想性、価値、意味などは除外された。

ヘットナー地理学の特徴を明らかにするため、リッター、ラッツェル、景観地理学、バンゼに対するヘットナーの見解をみておこう。

リッターについては、「地理学はこの時代になってようやく完全な科学的体系を整えた。一般には、この革新の功績を長い間カール・リッターのみに帰し、リッターを近代地理学の父とみなしているが、しかしそれは正しくはない。リッターと同等、あるいはそれ以上

にフンボルトは地理学の近代化に貢献した。」(p.145)と述べ、リッターだけが評価されていることに不満を呈しつつも、リッターを高く評価している。また、リッターが地理学の本質について「地理科学は、地域性の相互関係ならびに記載によって地球表面の空間が充填されている限り、とくにその空間を扱う。」と述べた点についても高い評価を与えている (p.195)。しかし、リッターが地域の特色の由来を目的論的に捉えていた点については、形而上学の名残りであり、客観的・事実に基づく因果関係の把握が不十分であると批判し、また、リッターにおいては歴史的側面が重視されすぎ、自然地理的側面が十分ではないと指摘している (pp.147-148, p.199)。

ラッツェルはあまり引用されておらず、どちらかというラッツェルに批判的な見解が述べられている。ラッツェルは人類・歴史に対する自然的条件の影響について論じたが、その場合の自然的条件は「長さ」「距離」「平面の形」「大きさ」といった空間の純粋な特性が中心になっていて、個々の空間の内容の相違性についてはあまり考察がなされていないという批判である (p.203)。地誌学の立場からすれば当然の見解で

あろうが、ラッツェルが人類(歴史)を、位置・空間等の自然的条件との関わりから地球的生命の一体性の中において捉えたこと(ラッツェル『人類地理学』1882,1891. 訳書・由比濱 2006)は、むしろ、地理教育的にみて重要な意義をもつものと筆者(山口)は考える(山口 2008a, 2008b)。

シュリューターなどの景観地理学・ラントシャフト論については、地理学の本質は地域性を捉えることにあり、景観だけでは地域性の本質は捉えられないと批判している(p.204, p.225)。

バンゼについては、「バンゼの『新地理学』、これは一種の革命を意味するものであろうが、この中では科学としての地理学は一つの階梯にすぎず、地理学の本質はむしろ芸術ということになる。バンゼの地理学は、地理学的な科学からはかけ離れたものである。」

(p.176)と批判するとともに、バンゼに関係する「審美地理学」についてかなりのページを割いて論及している。ヘットナーは「審美地理学」を地理学の一分野として認めつつも、考察が主観的になりやすい点が大きな問題点であるとし、また、芸術としての地理学については否定的である(pp.236-242, pp.318-321)。

地理学の古典的著作(フンボルト、リッター、ヘットナー、シュリューター、マルトンヌ)を紹介・考察した手塚(1991)は、その編著の中で、「ドイツ地理学におけるラントシャフト論の展開」と「19世紀の地理学思想史に関するいくつかの見解」という2つの解説的論考を著わしている。前者では、ヘットナーの地理学=地誌学の意義づけが議論のポイントとなっており、後者では、「ヘットナーとリヒトホーヘン」、「レーリーとハーツホーン」、「シェーファーとハーツホーン」の3つの論争が取り上げられているが、ハーツホーンをヘットナーの考え方を引き継ぐ者として捉えるならば、これら3論争はいずれもヘットナーの地理学=地誌学をめぐる論争ともいえる。このように、ヘットナーの地理学・地誌学は今日的にも重要な位置を占めていることがわかる。

3 地域性の因果連関的説明

「地域」を構成する諸要素の因果連関を実証的・科学的に考察し、地域の総合的な性格、即ち「地域性」を明らかにすることがヘットナーの地理学であった。

では、その因果の連関はどのように想定されるのであろうか。ヘットナーは地域の構成要素を大きく無機自然界、有機自然界、人類の3要素に分けた(図1)。無機自然界には地殻、水界、気界の三界(無機三界)が含まれ、有機自然界には植物界と動物界が含まれ、人類には、人種、民族、居住、交通、経済、文化、国家、宗教などが含まれる。そして、これら構成要素の関連についてヘットナーは、「地理的分類にとって有機自然ならびに人間のもつ意義は、無機自然の三界の持つ意義に比べると小さい。有機自然や人間の関係は無機自然の三界にきわめて密接に依存し、それに左右されるので、区分を決定するほどの力をもたないからである。地理的分類は全体としては新たに生ずるよりむしろ無機自然界に内在する差異および境界の表現である。」(pp.457-458)と、地域性形成の根本的要素は無機自然であると論じている。それでは無機自然を決定している要因は何か。これについては、「大地の起源は地球の内的営力であって、これが地殻の構造を左右し、それによって重力の法則にしたがう運動の機会をも与える。太陽光線は温度の差異を惹起し、空気の平衡運動や降雨現象の原因となる」、したがって「地質構造的現象と気候現象は最初から2つの相並行する別々の因果関係をなす。」(pp.451-452)と述べる。このようにヘットナーは地球の内的営力と外的営力とが地表の様態に影響する根本的要因であるとし、その上に立って具体的には「水陸の対照や内部構造の差異、そして地形の差異、さらに気候の差異が土地分類の際の基礎である。」(p.456)と述べている。ヘットナーの因果連関の捉え方は自然条件重視の性格を持ち、この点ではラッツェルと類似しているように思われる。

ヘットナーの地理学について、地理教育論の立場から下記の問題点を指摘しておきたい。

①数多くの諸要素間の因果連関、しかも無機自然を根本要素とする因果連関は本当に把握できるのであろうか。

②仮に、因果連関が把握できたとしても、「因果連関」=「地域の総合的な特性・個性」といえるのであろうか。

③仮に、ある特定小地域の総合的な特性・個性が把握されたとしても、世界各地域の特性とその空間的パターンの原理は明らかにできるのであろうか。気候については、ケッペンの気候地域区分図が知られ

ているが、地誌の場合に世界的な地誌的地域区分とその客観的因果連関の解明は可能であろうか。

以上のように、ヘットナーは地域性を地理学の中心のテーマとし、その地域性を科学的な因果関係によって解明しようとした。しかし、上記したような問題点を抱えていたため、地誌学は個別地域に関する知識の記載というレベルの研究とみなされるようになり、地理教育（地誌学習）は地名・物産の羅列的暗記的学習という烙印をおされるようになってしまったのである。

そもそも実証主義的な因果関係によって地域性の把握・解明はできるのであるか。ましてや地球全体の地域性のパターンとその因果関係の解明は可能なのであるか。また、地誌学の最終目的を地域性の把握と捉えることは妥当であろうか。最終目的は、地域・地域性の持つ「意味」を捉えることにあるのではなからうか。これらの課題は実証主義によっては解決が容易ではなく、ヘットナーが排除した世界観、思想、文明論、価値、意味などの考え方を導入することによって解決への道が開けてくる。これは地理哲学・地理思想の問題ともいえ、リッター(1818)の目的論、ラッツェル(1882,1891)の地球的生命の一体性、バンゼ(1935)の「芸術」、和辻(1935)の「風土」(山口2007)、木内(1968)の「地域精神」などはまさにそれに相当するものであったように思われる。

4 ヘットナーの地理教育論

(1) 「地理学的教養」について

「はしがき」でも述べたように、ヘットナーの『地理学』には、地理教育に関する2つの項目(部)がある。その1つが第7部「地理学的教養」である。人間が一般社会人として生きていく上で大切なものを「教養」とするならば、地理学的教養とは、人間が一般社会人として生きて上で大切な地理的な何かということになる。人間が生きる上で地理がいかに大切かということであり、地理教育の目標論に連なる重要な論点といえる。

ヘットナーは地理学的教養の本質を、「地理学的教養の本質は、要するに、地表の限らない多様性や諸国、諸地域の差異を概観し、その原因において理解することにある。」(p.601)と結論づけた。この見解は、

地誌学を中心におき、科学的因果関係の考察を重視する上記のヘットナー地理学と合致するものであり、地誌学習が持つ根本的重要性を「教養」という観点から意義づけたものとしてきわめて重要な指摘といえることができる。

この捉え方は、主として知的な側面に関わるものであり、「教養」としては、これに加えて態度的・実践的側面からの把握が一層大事となる。この点についてヘットナーは、「地理学的教養の方向」「地理学的教養の価値」という観点から論じ、大きく2つを指摘している。

第1は、「ドイツの国土とその美への理解、それを通じた郷土愛の覚醒あるいは強化」(p.698)、「ドイツ学は同時に郷土や祖国への愛を呼び起こすべき」(pp.600-601)などと述べている点、即ち、郷土・祖国への愛の育成という点である。外国に関する知識については、国は経済的・政治的など様々な面で諸外国と深く結びついているので、諸外国や全世界についての知識は当然必要であり(p.599)、「外国とドイツとの関係にとって前提である」(p.600)と、祖国に中心を置いた述べ方をしている。

第2は、「いかなる民族、国家、文化、経済も、土地、土地の位置ならびにその自然の特質を抜きにしては理解できない」(p.594)、「われわれの全生活は地球表面の自然に深くつなぎとめられている」(p.594)、「地理学は、人間による自然の改変ならびに自然への人間の従属を知ることを教え、人間は自然の外にではなく、自然の内において、自然の法則に従って自然の一部を形成していることを納得させる」(p.604)、「われわれの全存在は祖国の自然に従属する」(p.598)などと述べている点、即ち、民族や国家の存在が自然的基盤と深く結びついていることについての意識・態度の育成という点である。この点は、ヘットナーが、地域の構成要素の因果連関において無機自然界(無機三界)を根本的要素としたことと対応している。人間・人間社会に対する自然の重要性という点は、その理念・方法は異なるものの、リッターやラッツェルと共通しているといえよう。

ヘットナーが地理教育の根本目標とも関わる「地理学的教養」に言及したことはきわめて注目されることであり、ヘットナーの指摘した2つの態度的・実践的側面は地理教育の教育的意義・人間形成的意義を考え

る上において大変重要な論点である。ただし、そのことが、客観的・事実に地理学習から必然的に導き出されるものであるかどうかは検討を要する問題である。客観的・事実に地誌学習を行えば必ず郷土愛・祖国愛が育成できるであろうか。郷土愛・祖国愛を否定するような地誌学習もあり得るであろう。また、われわれの全存在が自然と深く関わっていることはその通りであるとしても、われわれが自然の一部であり、自然に隷属しているという意識的・態度的側面の育成は、どのようにすれば可能であろうか。地理教育的には、これらの点についての具体的な論及がほしいところである。

(2) 「初等学校、中等学校における地理学」について

『地理学』の第8部が「初等学校、中等学校における地理学」(pp.611-645)である。学校における「地理学は耐えてはいるが、下働きとして見下されている。いやな仕事をおしつけられている。」(p.611)という文言から始まる第8部では、学校における地理教育の様々な課題が論じられている。以下では、地理教育カリキュラム論に絞って2つの課題を取り上げたい。

カリキュラムに関する一つの課題は、シークエンスである。ヘットナーは結論として「地理学の授業は同心円で進められるべきであるという、経験の積んだ年配の教育学者が語った主張は、私には絶対に正しいように思われる。」(p.635-636)とし、「地理の授業は郷土から他の地方や国々に向かう」(p.627)、「ドイツについて他のヨーロッパ諸国が、そしてヨーロッパ以外の大陸が続く」(p.636)と述べている。ただし、ヨーロッパ以外の大陸を学習するに先立って地球の球形や気候帯について語る必要があるとする。つまり、「ヨーロッパから始めて、地球および大陸と海洋、おそらく気候帯を含めた分布に関する簡単な概観へ進み、アジアからアフリカとオーストラリア、そして南北アメリカと南極へ進めるのがよい」(p.636)と述べている。

一般に、地球全体に関する自然的条件(球形、地形、気候など)の学習は自国の学習から外国・世界の学習に入る時に行うのが普通のように思われるが、ヘットナーのシークエンス論では、ヨーロッパを学習した後に地球全体の自然的条件の学習を行うという順序である。これは、ヨーロッパは自国と陸続きの周囲であり、

かつ、政治的・経済的・文化的に深い関係があるので、自国からの延長上に学習することができるし、それが望ましいと考えたためであろう。ヨーロッパ以外の外国・大陸の学習となると、地球全体の形状・自然等の世界の概観的視野をあらかじめ学習しておく必要があると考えたためであろう。

もう一つの課題は、地誌学と一般地理学(系統地理学)との関係である。ヘットナーにとって地理学の中心は地誌学であるから、地理学習においても地誌学習が中心となる。「最近、学校の授業、とくに上級クラスに新しく導入された一般地理学の立場に関する論争が生じた」(p.630)が、「地誌学習に先行する一般地理学の優先に反対である。」(p.631)、「われわれは、概念形成の完全な一般化には、教授法の価値を少ししかおかない。」(p.630)と述べ、その理由として、「一般地理学は学校にとって難しすぎ、すべての学校での授業にとって大きな危険である言語知識へ再び帰着しやすさを恐れる。一般地理学は地理学的基盤を容易に失ってしまうことも恐れる。」(pp.633-634)と述べている。そして、「一般的な解釈」は「地誌学においてよく伝えられ」「地誌学の中でしか与えられない」(p.631)、したがって、「もっとも重要な一般概念や法則については、郷土のところで展開され、その他は残りのドイツの地方を扱う際に付加される。」(p.632)と述べている。一般的概念は具体的な事象の中で、つまり、地誌学習という具体的な学習の中で取り上げることが最も効果的であるというヘットナーの考え方は、地理的観念は郷土学習の中で直観的・具体的に上げていくべきであるとした牧口常三郎の地理教育論(牧口 1916, 大正5年)と類似する(山口 2004a, 山口 2004b, 山口 2006)。ただし、牧口は、地理教育論全体としてはヘットナーとは逆に、地誌学習よりも系統地理学習を重視している。

以上のように、ヘットナーは地誌学習を地理教育の中心に置き、そのシークエンスは同心円的なものが妥当であるとした。このことは、今日の地理学習のあり方を考える上で、きわめて注目されることである。

5 まとめ

本稿は、ヘットナーの主著『地理学』を資料として、ヘットナーの地理学について、地理教育論の立場から考察したものである。考察の結果は次のようにまとめ

られる。

- ①ヘットナーは地理学の中心を地誌学に置き、地域性に関わる因果関係を科学的・実証的に究明することを地理学の本質的課題とした。
- ②ヘットナーは、地域の構成要素を大きく無機自然界（無機三界）、有機自然界、人類の3要素に分け、無機自然界を根本的要素とした。
- ③ヘットナーは、地理学的教養の本質は地誌的内容の理解（地表の限りない多様性、諸国・諸地域の理解）であるとした。
- ④地理学的教養のうちの態度的・実践的側面として、郷土愛・祖国愛の育成、自然との結びつきの意識の育成を指摘した点は注目される。しかし、ヘットナーの実証主義の地理学から、このような態度的・意識的側面がどのように導き出されるのかについては、今後さらに検討が必要である。
- ⑤地理教育カリキュラムに関しては、ヘットナーは、系統地理学習よりも地誌学習が重要であること、同心円のシーケンスが妥当であることを主張した。この点は、地理教育における地誌学習の第一義的重要性の論拠として、今日的にも大きな意義をもつものといえる。
- ⑥ヘットナーは各地域の地域性を明らかにする学習（地誌学習）を重視したが、なぜ各地域の地域性の学習が必要なのか、その学習はどのような意味をもつのかという点については十分には論じていない。それゆえ、地誌という学習には、地名・物産の羅列的暗記的学習に陥る危険性が常に潜在しているといえる。
- ⑦この点を改善していくためには、地理学レベルにおいては、ヘットナーが除外した世界観、価値、意味などに関わる事柄（地理思想、地理哲学など）を考慮していくこと、地理教育レベルにおいては、地理教育論を「地理学教育論」ではなく、人間形成的意義、教育的意義を十分考慮した真の地理教育論として構築していくことが必要と思われる。

参考文献

- 水津一郎『近代地理学の開拓者たち』、地人書房、1974.3.
- 木内信蔵『地域概論』、東京大学出版会、全366頁、pp.216-224、1968.2.
- 手塚章編『地理学の古典』、古今書院、全422頁、1991.10.
- 野間三郎「近代地理学の発達」、木内信蔵・西川治編『朝倉地理学講座1 地理学総論』、朝倉書店、pp.10-61、1967.8.
- バンゼ・佐藤荘一郎訳『国防意識と地理学』、岡倉書房、原著1935、訳書1944.10.
- ヘットナー著、平川一臣他訳『地理学—歴史・本質・方法』、古今書院、原著1927、訳書2001.3.
- 牧口常三郎『再版地理教授の方法及び内容の研究』、聖教出版社1978.11、初版は1916年.
- 山口幸男「牧口常三郎『人生地理学』の社会科地理教育論的考察」、群馬大学教育学部紀要人文社会科学編、第53巻 pp.135-151、2004a.3.
- 山口幸男「牧口常三郎の郷土教育論に関する考察」、群馬大学教育実践研究、21号、pp.29-38、2004b.3.
- 山口幸男「牧口常三郎の地理教育論」、群馬大学教育実践研究、23号、pp.17-30、2006.3.
- 山口幸男「人間及び人間社会の存在の風土性・空間性に関する地理教育論的考察—和辻哲郎の風土論を基に—」、新地理54-4、pp.34-42、2007.3.
- 山口幸男「ラッツェル『人類地理学』に関する地理教育論的考察」、群馬大学教育学部紀要人文社会科学編、第57巻、pp.135-151、2008a.3.
- 山口幸男「ラッツェルとブラーシュに関する地理教育論的考察」、群馬大学教科教育学研究第7号、pp.1-6、2008b.3.
- ラッツェル著・由比濱省吾訳『人類地理学第一巻、第二巻』古今書院、原著1882,1891、訳書2006.2.
- リッター「一般比較地理学の試みへの序説」、1818、手塚章『地理学の古典』古今書院1991.10、所収.
- 和辻哲郎『風土—人間学的考察—』、岩波書店、1935.9.

(やまぐち ゆきお)

